

多くの賞を受賞するなど、国際的に高い評価を得ており、今後の輸出拡大の余地が大きいと考えられます。

このような中、国産花きの国内シェア回復と輸出拡大を図るため、大規模な次世代施設園芸団地の整備や産地間連携によるリレー出荷を通じた、高品質な切り花・鉢物を安定供給できる体制の整備、海外におけるオールジャパン体制によるプロモーション活動等が課題となっています。

表2-4-2 花きの輸入額及び輸出額の推移

(単位：百万円)

	平成 15 年 (2003)	17 (2005)	19 (2007)	21 (2009)	23 (2011)	24 (2012)
輸入額	45,548	48,881	56,552	47,574	50,358	54,488
切り花	23,461	28,706	33,597	31,635	35,252	39,526
球根類	12,386	10,720	12,445	7,586	6,980	6,547
根付の植物等	9,701	9,455	10,510	8,354	8,126	8,414
輸出額	1,361	1,955	5,656	4,971	7,087	8,623
鉢物・盆栽・植木等	886	1,407	5,120	4,465	6,692	8,169
球根類	271	231	190	129	80	86
苗物(挿穂、接ぎ穂)	132	214	196	244	190	226
切り花(生鮮)	19	37	48	50	64	87
その他	54	66	103	83	61	55

資料：財務省「貿易統計」、農林水産省「植物検疫統計」を基に農林水産省で作成

## (7) 茶

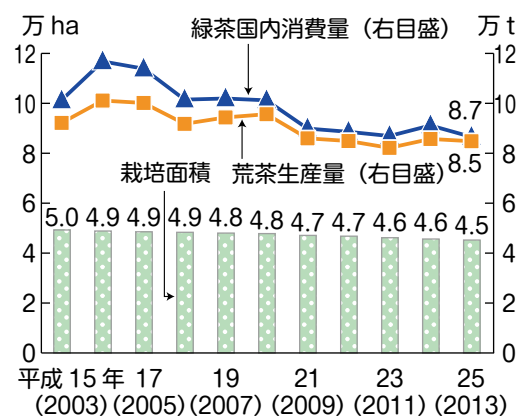
### (茶の国内消費量は減少傾向)

平成 25 (2013) 年の茶の栽培面積は、平成 15 (2003) 年からの 10 年間で 8 % 減少し 4 万 5 千 ha となっています(図 2-4-13)。また、茶の生産量は緑茶飲料の需要増加により、平成 16 (2004) 年に 10 万 t を超えたものの、近年は消費量の減少とともに生産量も減少し 8 万 5 千 t 程度で推移しています。

このため、茶業の振興に向けて、茶の消費拡大を図ることが課題となっており、低カフェイン茶等の消費者の多様なニーズに対応した商品開発、新たな用途への利用に関する研究開発・普及等を図ることが重要です。

一方、緑茶の輸出量はおおむね増加傾向で推移しており、平成 25 (2013) 年は前年に比べて 592 t 増加し 2,942 t となっています<sup>1</sup>。茶の輸出は、海外における健康志向等を背景として増加しており、今後も一層の輸出拡大が期待されています。

図2-4-13 茶の栽培面積、生産量等の推移



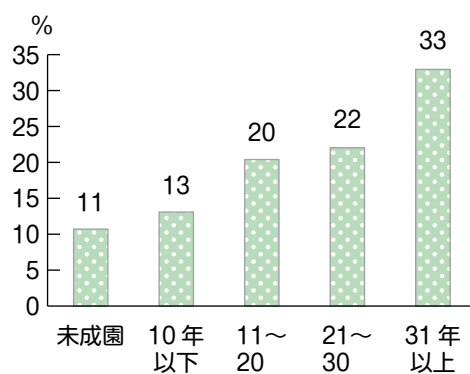
資料：農林水産省「作物統計」、全国茶生産団体連合会調べ  
注：国内消費量＝国内生産量＋輸入量－輸出量  
平成 23 (2011) 年及び平成 24 (2012) 年の荒茶生産量は主産県の値。

<sup>1</sup> 財務省「貿易統計」

### (特徴ある品種による生産構造の強化)

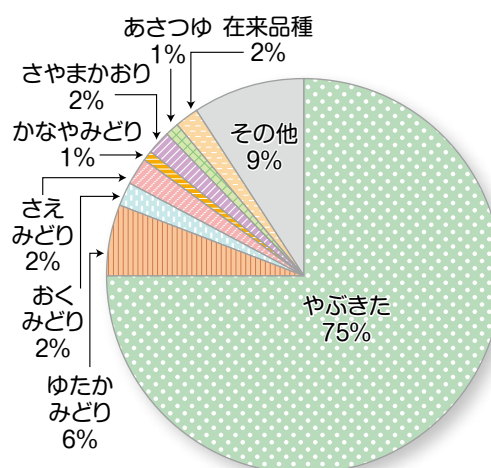
茶園面積を樹齢別にみると、茶園の33%が樹齢30年以上の老園となっており、根系の老化等による収量減少やうまみ成分(アミノ酸)の含量低下が懸念されています(図2-4-14)。また、茶園面積を品種別にみると、昭和30年代以降に品評会で高い評価を得たことを背景として、茶園面積の75%を「やぶきた」が占めていますが、摘採作業の集中や摘み遅れによる品質低下、お茶の風味の画一化等を招いているのではないかとの指摘もあります(図2-4-15)。

図2-4-14 茶園面積の樹齢別割合  
(平成23(2011)年度)



資料：農林水産省調べ

図2-4-15 茶園面積の品種別割合  
(平成24(2012)年度)



資料：農林水産省調べ

このような中、風味や耐病性に優れ、「やぶきた」とは収穫適期の異なる「なんめい」や「さえあかり」等の品種が開発されています。また、メチル化カテキン<sup>1</sup>含量が高い「べにふうき」やアントシアニン<sup>2</sup>含量が高い「サンルージュ」のような機能性成分による需要拡大が期待される品種も開発されています。

今後、生産性が低下した老園において、このような特徴ある品種への改植等を進めることにより、作期分散による作業の効率化や品質向上を図るとともに、新たな需要創出に取り組んでいくことが重要です。

## (8) 甘味資源作物

### (てんさい、さとうきびは近年不作傾向)

てんさいの作付面積は、労働力不足等を背景として、近年減少傾向で推移しており、平成25(2013)年産は5万8千haとなっています<sup>3</sup>。また、単収の推移をみると、平成22(2010)年産において大きく低下していますが、平成23(2011)年産以降は回復がみられます(図2-4-16)。しかしながら、てんさいの糖度は、平成22(2010)年産以降、収穫前の夏から秋における高温多湿の影響を受け低い水準となっています。

一方、さとうきびの収穫面積は、近年おおむね横ばいで推移しており、平成24(2012)

1 茶葉中に含有されるポリフェノールの一種で、抗アレルギー作用を有している。

2 アントシアニンは、赤、赤紫、紫、青を呈する植物色素。アントシアニンの種類により発現される機能性及び活性の強弱は異なるが、抗酸化性は共通して発現される。

3 農林水産省「作物統計」